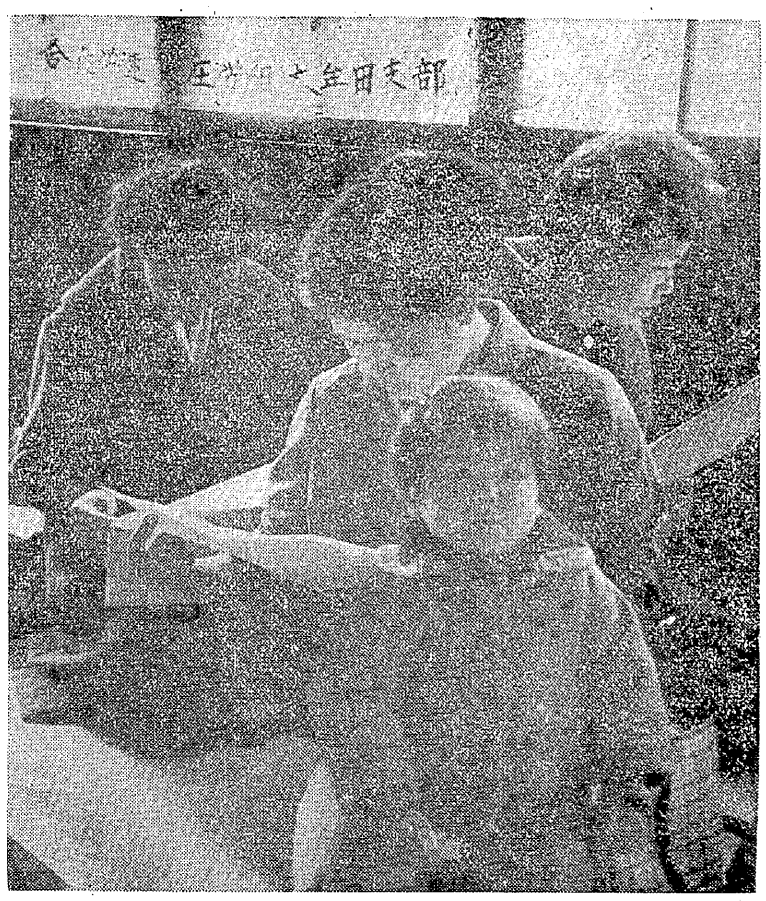


▼…三池労組が、労働省通告の撤回をめざしてたたかいに立ちあがってからちょうど一カ月、やっと十月三十一日にさかのぼって、政府の責任でCO患者の治療継続を当の労働省に約束させることができた。

二十六日谷端三川支部長のくわしい説明にすべてを理解した家族の会の人々は、さすがに思わず胸をなでおろしたのだったが、じかしこれから労働省・会社側の出方に対処する決意は胸の底に固まっている。（写真は報告書に見入る患者の家族）

随筆

女の春秋

港務　柿坂　敏

「女性よ美しくあれ」と願うのは、古来からの男性の共通の念願であろう。このことは、女性と女房とを興奮のもののように考える古ボケタル亭主族にとっても、また例外ではあるまい。しかるに世の女房族たちは、あの豪華であった嫁入道具の鏡掛の刺繍が色あせる頃になると、亭主族の純情にして、ささやかなる願望などは無視してかかる。おきたてに見せる朝顔の花にも似たるサワヤカなる薄化粧、夕べの風呂あがりの、夕顔の花にも似たるホノボノとしたる化粧を、せめて月に一度くらいはと期待しても、なにも三池主婦会え叛逆罪にもなるまい……。

まさか釣上たる魚には餌はやらぬぞーというような、サムザムとしたる女房族の申し合せの処世訓でもなかろうに。ところがですぞこれが外出となると、ガラリと豹変するから驚く、やれ着物、ハキモノとその五月蠅いこと。鏡の前に鎮座したら、それこそ、足にシビレの切れる程、小ジワのできた顔に時間と空間と茫忘却したるはかない抵抗をこころみるんだから亭主族はやりきれない。

こんな理論騒然としたる？前口上で、妻や娘を皮肉ったらたちまち一矢むくいられた妻が外出のとき、オシャレするのは夫たるものの、社会的体面維持の外交辞令的行為だそうだ。妻のショボタレた容姿は、夫の価値を失墜させると同時に、男の自尊心を傷つけるそのことのためにのみ、妻は苦労するので結果はみんな、夫よかれの遠謀心慮だそうで「老桜、だがため紅ガネつけようぞ」の小唄まで引用されては、私の皮肉とも、嘆きともつかぬような抗議はペシャンコになって仕舞った。

× ×

久し振の旧友からの便りだったので、妻にも披露した。ところが末尾に「愚妻からもよろしく」と書いてある、この愚妻という字句だったら『主人からもよろしく』と書くところなのに、愚妻とは読んで字の如く、馬鹿な妻ということで、手紙の約束語にしても女を軽蔑したる日本の男性の思想のあらわれだ」となかなかに手きびしい。「しかし、まさか他人に愛妻からもよろしくとは書けぬだろう」と茶化すと「愛妻なんかと書いてもらはなくても、せめて家内からもよろしくぐらいの表現にしてもらいたい。ぜひ愚妻なる手紙の約束語はなくしてほしいもの、こんな言葉がいまだに残っていると思うとなんだか妻の座がわびしくなる」と妻の抗議が哀調までおびてきたので私はコッケイになってきた。

そこで私はある語学者の「愚妻」なる約束語の解釈を引用して妻には気にくわぬらしい。さきは程の化粧問答の引掛りも多少あったろう。妻はいう「日本の男性はどうしてこんなに照れガリ屋なのだろうか、それとも女の位置を低く甘くみているのだろうか、なにも愚かなる妻とまでへり下って表現することもあるまい。女の場合世の男性のために申し開きをこころみた。「愚妻なる言葉の本来の意味は、決して愚かなる者の妻ということではなく、愚かなる者の妻と解釈するのが正しい。すなわち、男自身がヘリ下っている言葉である」と説明をした。妻はいままで勢込んでいただけに、ポカンとした。しかし語学者の説という権厳の前にそれ以上の文句もでなかった。

ところがそばで縫物をしていた長女が、「そうすると、お母さんは愚かなる者の妻ということになるねー」と妙に力をいれていうとクスリと笑った。

これは、文化の日の、文化とは程遠いわが家の平和な、ヘイワな炉辺談話である。

（一九六六年十一月）

夫へ一言

子どもに励まされる

主人が脊髄で入院してから三カ月になります。こうなってはじめて健康ということを考えるようになりました。

私も仕事に出ていて、病院と主婦会役員の仕事とのかけもちでは子どもたちとゆっくり話しあう暇もないくらいです。しかし子どもなりに理解し、小学二年の子どもが幼稚園の下の子の世話をしたり遅く帰るときは黒板に連絡や「おやすみなさい」と書いてあると、この子どもに励まされ支えられる思いです。

先日全員集会をしたとき、内職している主婦の悩みが出ました。みんなが働かねばならないから、少しくらいの病気でも、無理をしながら働いているのが現実です。

一番に健康考えて

主人が仕事に出ているときは、毎日帰りが遅くなったりすると本当に〝きつかろうね〟と思いますしかし病気になると、やはり労働者は身体だけが〝もとで〟だから組合活動にしても、みんな限界以上の無理をしたらいけないと思うようになりました。

金で買えない健康 ⑬

生命はもっと大切に

本所・宮原分会

平川弘子さん（30才）

職場でも〝今月は何日出たから給料はいくらになる〟とよく聞きます。日給だから仕方ないとしても、最初に身体を考えてほしいと思います。健康は金にかえられるものではないのですから、自分の身体をすりへらすような労働強化は反対です。

CO問題を自分のものに……

先日、CO問題で署名にまわりました。そのなかで「そんなことがあるのですか。私たちは一日をどうにか暮しているので、自分からすすんで反対など」といわれました。みんな、自分たちがどの位置にあるのか慣されて判らないのではないかと思います。

CO問題も、たしかに少しずつ拡がっています。それでもやはりCO問題はガス患者の問題としてしか受けとられていません。

私も臨時で雇われると、同じ仕事をしながら待遇は違うなど、矛盾を感じます。また他の人も、食えないから働くなかで、自分で気づかないうちに身体をすりへらしているのではないかと思います。

自分や家族の健康を考えると、CO問題も自分のこととして受けとめなければと思います。

新年文芸募集

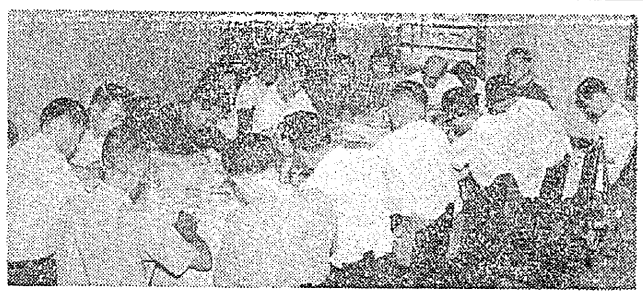
▼…組合員ならびに家族のみなさん、私たちはことしも一年間団結を固めてたたかいながら、目の前に新年を迎えようとしています本紙では新年を力強く迎えようと〝新年特別号〟を発行する計画です。みんなでつくりましょう。それには短篇小説、詩、短歌、俳句川柳、コントなどの文芸や職場報告、生活つづり方、笑い話、マンガ、その他自分の手でできるあらゆるものを、組合本部に寄せて下さい。きたる二十日本部必着でお願いします。

みいけ編集部

中国訪問記 (3)

学び実践する

宮浦坂口直行



わたくしたちはこんどの訪中で発展する工業について、無から有を生み出す状況のもとに出発したという、建設の原則的思想に各所で触れることができました。

〝西安人民ホーロービキ工場を訪ねましたが、この工場は国の方針で、ホーロービキ工場がなかったこの狭西の地域に、千九百五十一年、解放軍の兵士三人が中心となり、復員軍人二十人で開いたわけです。

資金は解放軍の部隊が畑仕事、鉄道工事をやりながら蓄積した二十万円ぐらいの資金から始める。製品に大衆の中から批判がでたため従業員自から起ち上がり、積極的に大衆運動を行なわせ、この中で労働者と技術者と指導者の三者を完全に結合することが、この工場の建設をより一層前進させることを理解し、いままで輸入にたよっていた色素も百回以上に及ぶ実験で作り出すことに成功し、大衆にたより大衆の意見を聞いて、大衆によろこばれる製品をつくる。

需要が増加して工場の拡張が行なわれた時、政府から援助してもらうか自力更生かの意見に分かれ、全員の意見が自力更生でゆくこととなり、とうとうやりとげ、工場の機械さえ八〇％―三百八十台はここの労働者自身が作ったものです。

従業員も当時の百人から、今は千三百人余りとなり、生産額も一千九百六十五年は五十九年の十五倍にふえ、製品の種類もはるかに多くなっている。

福利施設も改善され、新しい宿舎、託児所、保育所、映写機をもち、つねに従業員の健康管理にも配慮している。

わたくしたちはここの工場を見て「解放軍は軍隊であるばかりでなく、人民に奉仕する工作部隊でもある」毛沢東思想を実践した、社会主義建設の真髄にふれた思いでした。

わたくしたちは上海市の国営万年筆工場を訪ねて、毛沢東著作の学習を見ました。

工場の入口には、文化大革命を祝う表示が本当に若々しさと、建設の力をあらわしていたが、特に毛沢東著作について労働者の馬長海さんは「私は実際に労働の体験の中から、学習することになりました」と、次のように話してくれる。

「当時私の職場では、生産が高まらなかったのです。これはどういうわけか。人民に奉仕する意識が足りないのではないだろうか。ということが指摘され、毛沢東の『バツーン（外国人医師）を記念する』を読み、外国人でさえ中国にきて仕事に打ち込み、建設に努力しているのに、中国人自身が打ち込めないのはどういう理由か、考え、学習し、相談したのです。そして、班の中にへだたりがあり、不団結があったのです。そこで更に毛沢東の『自由主義に反対する』をみんなで学習しました。そして団結―批判―団結の不足をとうとう克服して班の団結がよくなり、一千九百六十四年と六十五年とつづいて先進班となり、それでますます毛沢東著作を学習するようになりました」

また二十二才の婦人労働者泄さんは、学習をはじめた動機を次のように話してくれました。

「わたくしは仕事が少しもうまくゆかず、へまばかりしていたのです。それでこの仕事はわたくしにはむかない。他の仕事にうつしてもらえばきっとうまくゆくと思っていたのです。それで上級の指導の学習に参加し、感想など書いているうち、どんな仕事にも困難はつきものということを知り、技術をおぼえる集団学習を終えてから、仕事もうまくやれるようになり、はげみも出てきたのです。魚は水から離れることができないのと同じように、仕事をうまくやろうと思えば毛沢東の著作から離れることはできません」

この工場は労働者が二千人で、うち婦人労働者は三〇％ぐらい。附近に鉄筋五階建ての家族宿舎があり、独身宿舎、託児所、診療所、幼稚園などが完備されていました。

婦人労働者の宿舎を見せてもらいました。部屋の中の高机には毛沢東著作等が置かれていました。ここの婦人労働者たちも比べ、学び、追いつき追いこすことを職場のスローガンとし、更にベトナムのアメリカ侵略反対、民族解放闘争を支持する強い決意を、わたくしたちはハッキリと知ることができました。

（おわり）